

自校史教育の支援をめぐる 学校アーカイブズの可能性

－福岡女学院資料室の取り組みをとおして－

井上 美香子

1. はじめに

徳永ヨシ（1895～1957）は、福岡女学校（現在の福岡女学院）の第11代校長である。ヨシは、第二次世界大戦中にキリスト教主義学校が迫害をうけるなか、福岡女学院におけるキリスト教教育をまもり、学院の戦後の復興に尽力した。

福岡女学院資料室では、2017年9月から2019年5月にかけて、戦後の福岡女学院の基礎を築いた人物の一人である徳永ヨシに着目する活動を展開した。本稿では、徳永ヨシに着目した一連の活動をとおして、自校史教育支援をめぐる学校アーカイブズの可能性について検討したい。

そこで、本稿ではまず、徳永ヨシについてその生い立ちと福岡女学院における働きについて紹介する。次に、徳永ヨシに着目した資料室における一連の活動内容からみえてきた自校史教育支援をめぐる学校アーカイブズの可能性と今後の課題について論じたい。

2. 徳永ヨシについて

福岡女学校では、1885（明治18）年から1899年の第4代校長 Lida B. Smith まで、外国人の校長を助ける為に、日本人の校長も置くという形をとっていた。1899年第5代校長 L. M. seeds 以降、外国人の宣教師のみが学校長の任にあたるようになっていた。これに



写真1：ハウイ校長
（福岡女学院資料室所蔵）

対し、第10代校長の Harriet M. Howey (以下、ハウイ、写真1) は「もし今、日本の女性の中にその任(福岡女学校校長)にあたることのできる人を見出し得ないならば、日本に於ての宣教師の今までの働きは凡て失敗に終わったのだ」(ハリエット・M・ハウイ、1960. カッコ内は筆者による補足) と考え、日本人女性に福岡女学校の次期校長を任せることを固く決意していた。そして、次期校長としてハウイが心に決めていた人物が徳永ヨシであった(写真2、3)。

徳永ヨシは、1895年1月に熊本県八代郡太田郷村(現在の八代市萩原町)に生まれた。父親の規矩は慶應義塾在学中にキリスト教に入信し1887年に熊本でキリスト教主義の熊本学校を起こした人物であり、ヨシの母親である歌子は12歳で同志社に学んだ。このように、ヨシは日々の生活の中にキリスト教の教えがある家庭で育った。父親の病氣療養のために長崎に転居すると、ヨシは3歳で活水女学校附属幼稚園に預けられた。

こうしてヨシは、活水女学校附属の小学科、予備科、初等科、大学予科を経て、1918(大正7)年に本科を首席で卒業した。同年、活水女学校の英語科教員となった後、1922年に活水女子専門学校の教授となった。1928(昭和3)年にはアメリカメソジスト教会婦人外国伝道会の奨学金を受けボストン大学の第3学年に編入、同大学院へ進学した。

大学院を修了した1931年に再び活水女子専門学校の英語と聖書の教授となった。ヨシが福岡女学校の第11代校長となったのはそれから4か月後の1932年4月のことであった。福岡女学校の校長になってほしいというハウイからの突然の申し出にヨシは大変戸惑ったが、深い祈りのなかで引き受ける



写真2：校長として就任した頃のヨシ
(福岡女学院資料室所蔵)



写真3：25年間校長職を務めた
(福岡女学院資料室所蔵)

ことを決断したという（ハリエット・M・ハウイ、1960.）

こうして、徳永ヨシは25年もの長きにわたり福岡女学校校長、福岡女学院中学・高校の校長を務めることとなった。この間、特に忘れてはならない福岡女学院における徳永ヨシの働きは、①財団法人設立の認可申請の際にキリスト教主義学校であることをまもりぬいたこと、②総合学園構想のもと、戦後、日佐校地（現在の福岡女学院の校地）の購入に踏み切ったこと、③幼稚園の開設、である。このように、キリスト教教育を守りぬき総合学園の基礎を築いたという点で福岡女学院の歴史に重要な役割を果たした人物であるといえる。

福岡女学院におけるこうしたヨシの働きについてはこれまで、学院の沿革史や徳永ヨシ伝記編集委員による『徳永ヨシ その生涯と思い出』などに書き記されてきた。しかし、徳永ヨシが校長だった頃に生徒だった同窓生も高齢化しており、『徳永ヨシ その生涯と思い出』を手にとらない限り、現在の学生・生徒がヨシのことを知る機会はほとんどない。そこで資料室では、自校史教育に対する支援の一環として、展示室に徳永ヨシ関連資料を展示するコーナーを新たに設置するなどの取り組みを行った。次章では、この取り組みの詳細について紹介したい。

3. 活動内容

（1）徳永ヨシ関連資料コーナーの開設

2019（平成31）年5月16日、展示室に徳永ヨシ関連資料コーナーを開設した。

展示室は、学院の沿革を紹介する常設展示とテーマや期限を設けて展示する特別展示から構成されているが、展示室の広さは104㎡と余り広くはない。

そのため、展示コーナーの増設によって見学者が展示室内を狭く感じたり圧迫感を感じたりすることがないように、徳永ヨシ関連資料については展示ケース（横87cm×奥行55cm）2台分での展示にとどめ、映像資料の投影



写真4：スクロール式のスクリーン
を下した様子

については未使用時には天井に収納可能なスクロール式のスクリーンを使用するなどの工夫をした（写真4）。関係資料の展示には、ヨシのキリスト教に対する信仰の姿勢や女子教育に対する考えがうかがえるような資料を選定し写真や手書きメモなどを展示した（写真5、6）。



写真5：1928年にボストン大学に留学した際のヨシのパスポート（左）、校長時代のヨシの写真（右2枚）

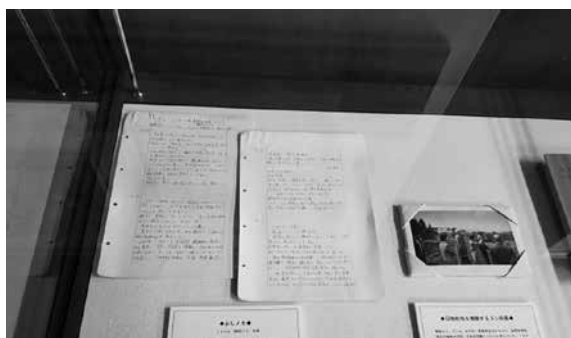


写真6：1938年にヨシが記したメモの謄写。
内容は日記に近い（左）、日佐の土地を視察するヨシの写真（右）

(2) 映像資料『徳永ヨシとその時代』の作成支援と特別上映

福岡女学院における自校史教育およびキリスト教教育に資するため、学院では、2018年12月11日に教材の映像資料として『徳永ヨシとその時代』を作成した。

原案およびシナリオは徳永ヨシの甥にあたる故・徳永徹福岡女学院名誉院長が執筆し、井上美香子(学院資料室)、西山尚宏(本部事務局)、高木貴子・藤田健二(広報校友課)が編集を担当し資料の提供を行った。

資料室では映像資料の完成を記念し、2019年5月18日の創立記念日に特別上映会を開催した。創立記念日に展示室に来場した201名の中には同窓生や在校生のほかにも学外の方もおり、上映会は学院の歴史を学内のみならず学外の方々にも伝える上で良い機会となった(写真7、8)。

この『徳永ヨシとその時代』は、福岡女学院中学および高校の授業で主に使用されることとなったが、生徒たちが自由に入り

することができる徳永ヨシ記念祈禱室においても常時観ることができるになっている。また、大学の授業等でも利用できるように、資料室では『徳永ヨシとその時代』のDVDの貸し出しを実施し自校史教育の支援を行っている。



写真7：特別上映会の開催案内のチラシ



写真8：HPにおける特別上映会の開催案内

(3) 中高礼拝奨励

授業で中学校及び高校の生徒たちが『徳永ヨシとその時代』を観る前の導入として、資料室では2018年12月17日の中高礼拝にて「徳永ヨシ先生の御生涯」と題して奨励を行った（巻末の資料を参照）。

4. まとめと今後の課題

以上、自校史教育に対する支援の一環として、資料室では、展示室における徳永ヨシ関連資料コーナーの開設、映像資料『徳永ヨシとその時代』の作成支援と上映会の開催、中高礼拝奨励を行った。



写真9：日佐の土地を視察するヨシ
(福岡女学院資料室所蔵)

徳永ヨシ関連資料の展示を案内するなかで、日佐の土地（現在の福岡女学院所在地）を視察するヨシの写真（写真9）に関心を示した学生が多かった。多くの住宅が近隣に立ち並び福岡女学院のキャンパスとして活気をみせる現在とは異なる草や木が生い茂る日佐の写真を見て、学生・生徒達は非常に驚いた様子であった。この写真に最も関心を示した理由は、ヨシの展示物と学生・生徒たちがもつ学院に関する知識とを結びつけることができた情報が“日佐の校地”だったからであろうと思われる。

ここから、学生たちに学院の歴史を語る上で、彼女たちを取り巻く“学院の現在”－現在の校舎が存する土地、学生・生徒が実際に参加している行事、現在の学校施設、学院の文化など－を入口とすることが、歴史を身近に感じてもらおう上で有効な手段であることに改めて気づかされた。それとともに、学生や生徒達をとりまく“学院の現在”から歴史を掘り下げていくことは、学生・生徒たちに学院の歴史を伝える役割を担う資料室にとって課題であることも明らかとなった。

今回は展示活動のほかには資料室としては新たに、映像資料『徳永ヨシとその時代』の作成支援と上映会の開催、中高礼拝奨励を行った。このことにより、自校史教育の実施を支援するうえで学校アーカイブズには多くの可能性を有することを確認した。

なお、自校史教育の支援である映像資料の作成や礼拝奨励については、資料室では今回の取り組みが初めてである。その成果については、今後、これらの取り組みを継続して行った上で検討したい。

【資料】

「徳永ヨシ先生の御生涯」（2018年12月17日 中高礼拝奨励）

おはようございます、私は学院資料室の井上と申します。学院資料室は正門を入れてむかって左側にある大きな建物ですが、その6階にあります。学院資料室には、福岡女学院が創設されてから現在に至るまでの歴史が分かる史料などが展示されていますので、是非、一度、見に来ていただけたらと思います。

さて、今日は「徳永ヨシ先生のご生涯」について、お話しさせて頂きたいと思います。徳永ヨシ先生は、第11代校長先生として、1932年（昭和7）～1957（昭和32）年まで、25年もの長い間、この福岡女学院をまもってこられた方です。今年（2018年）9月にご逝去されました名誉院長の徳永徹先生の叔母様にあたります。徳永ヨシ先生は、1895（明治28）年に熊本県八代にお生まれになりました。徳永ヨシ先生の御親戚には徳富蘇峰、徳富蘆花がおられ、ヨシ先生をはじめ、お父様、お母様、御親戚もとても熱心なキリスト者が多く、そうした環境の中でヨシ先生はお育ちになりました。

幼稚園、初等科、大学予科（大学部に進学する前の教育を施す場所）と、長崎の活水女学校で学び、1913年（大正2）年には活水女学校大学部本科に進学し、1916（大正5）年に活水女学校大学部を主席で卒業されました。その後、活水女子専門学校の教員になられました。1928（昭和3）年には、留学のために活水を退職し、アメリカのボストン大学に留学、大学院も修了し

学位を取得されました。そして、留学から日本に戻った翌年、この福岡女学院（その当時は福岡女学校という名称でした）の校長に就任されました。

福岡女学院の校長に就任された時代は、とても大変な時代でした。満州事変が起きて、日本が戦争に突き進んでいくことは皆さんご存知ですね。福岡女学院はアメリカの宣教師が作った学校で校長先生もアメリカの宣教師でした。そして、学校そのものもアメリカの財産によるものでしたから、敵の財産として日本国に没収される可能性が非常に高い状況にありました。

そこで、この福岡女学院を財団法人化して校長も日本人にしようということになりました。つまり、日本人が作った学校ではないということ、キリスト教の学校であること、こうした点でこの時代、福岡女学院は非常に厳しい立場にあったのです。こうした状況のなかで、徳永ヨシ先生は校長先生として就任することをお引き受けになりました。

ますます戦時色がつよくなっていった1940年頃には、キリスト教系の学校に対する弾圧も非常に色濃くなってゆき、福岡女学院もキリスト教教育や聖書の時間をとりやめること、つまり、福岡女学院の根幹ともいえるキリスト教を放棄することを文部省から強要されていました。こうした中、徳永ヨシ先生はキリスト教でなければ福岡女学院ではないという強い信念のもと文部省の要求を拒み続け、福岡女学院は戦時下もキリスト教の学校で存続することができました。

戦後、福岡大空襲で福岡女学院の校舎はほとんど焼けてしまいました。校舎もなくなり、もちろん教室も焼けました。教科書もありません。こうした何も無い状況から、徳永ヨシ先生は福岡女学院を戦後、立て直していきました。そうして現在の福岡女学院があるのです。

徳永ヨシ先生は、戦前、女性の留学がまだ当たり前ではなかった時代に単身で海外に留学され、日本が戦争に突き進もうとしている厳しい社会状況のなかキリスト教の学校である福岡女学院の校長先生に就任なさり、キリスト教に対する弾圧がますます厳しくなる戦時下もキリスト教の学校であることを守り続け、戦後学院を立て直されました。

徳永ヨシ先生のこうした足跡をみると、何ものをも恐れない、とても強い女性だったのだろうと想像されるかもしれません。皆さんの中には、この人

だからこそできたのであろう、あるいは、強い人だからこそできたのだらう、“私とは違う”、と思うかもしれません。確かにとても強い意志と信念をもった女性であったことは間違いないでしょう。しかし、もともと強い人だったのでしょうか、そもそも最初から強い人なんているのでしょうか。

福岡女学院の校長先生になることを求められたとき、徳永ヨシ先生は「どうも自信がない」とおっしゃったそうです。そして、本当にとてもとても穏やかな性格の方で、しかし一方で非常に強い信念を持った方だったそうです。そんな徳永ヨシ先生の強さを作り出した、あるいは彼女の強さや心を支えたものは一体何だったのでしょうか。

私は2つあると思います。一つは、キリスト教に対する信仰心、信じる心だと思います。学校の行事でとても責任のある仕事をまかされた生徒がその重圧に押しつぶされそうになっていたとき、ヨシ先生は「どんなに苦しい事があっても、自信が無くなっても、その仕事はあなただけしかできないから、神様があなたにさせておられるのよ。その事を覚えていれば、どんな時にも強くなれますよ」と言われたそうです。また、こういうこともおっしゃっています「一本のろうそくはクリスチャンのよい象徴です。ろうそくは、自分自身を文字通りもやしつくして他のものに光を与えます」と。

ヨシ先生は、キリスト教に対する弾圧が厳しい時代に校長になることをお引き受けになられ、そして、福岡女学院のキリスト教教育を守り続けてこられました。キリスト教の学校として福岡女学院を守りともに前に進んでいくため、その時々で、決断をしながら、ヨシ先生は歩いていかれました。決断する勇氣と前にすすんでゆく力、そのヨシ先生の強さの背景には先の言葉にあったように、“この仕事は自分にしかできないことだから、神様が自分にさせておられるのだ”というキリスト教を信じるゆるぎない心が、ヨシ先生のお心をささえ、信念をより一層強いものにしたのではないかと思われまます。

それから、2つ目として、「何何らしくあること」と、いうことです。ヨシ先生は、いつもよく生徒たちに、「福岡女学院の生徒らしくありなさい」「福岡女学院の生徒らしく行動しなさい」とおっしゃっていたそうです。

それでは、この「福岡女学院の生徒らしくある」とは一体どういうことなのでしょう。実は、「福岡女学院の生徒らしい」とはどういうことなのか、

その具体的な内容をお話になったことは一度もなかったようです。「福岡女学院の生徒らしく行動する」とはどういうことなのか、それは一人一人が自分自身で考え祈りのなかに導きだすことだと、ヨシ先生は考えておられたからでしょう。

おそらく、ヨシ先生ご自身、「福岡女学院の教員らしく」あること、私（わたし）らしくあるためにはどうしたらよいでしょうかと祈り、そしてその答えを導きだされながら、一步一步歩んでこられたのだと思います。「福岡女学院の教員らしく行動するとはどういうことなのか」、「私らしく行動するとはどういうことなのか」を自問自答し、日々の深い祈りのなかで導き出された決意は揺るぎのないものとなり、ヨシ先生は勇気をもって力強く前に進んで行くことができたのだと思います。

今日は、徳永ヨシ先生のご生涯を通して、その力強い生き方の背景にあるものは何なのかについてお話をいたしました。

「福岡女学院の生徒らしくあること」、「わたくしらしくあること」、あるいは「わたくしらしく生きること」とは、いったい何なのでしょう。是非、一度、皆さんも考えてみてはいかがでしょうか。

では黙祷をもっておわりたいと思います。

引用、参考文献

- ハリエット・M・ハヴィ(1960)「神に導かれ給うた徳永ヨシ先生」徳永ヨシ伝記編修委員会編『徳永ヨシ その生涯と思い出』、学校法人福岡女学院、pp67～69
- 福岡女学院75年史編集委員会（1961）『福岡女学院七十五年史』
- 福岡女学院百年史編集委員会（1987）『福岡女学院百年史』
- 福岡女学院120年史編集委員会（2008）『福岡女学院120年史』
- 徳永徹（2012）『凜として花一輪－福岡女学院ものがたり－』、梓書院
- 徳永ヨシ伝記編修委員（1960）『徳永ヨシ その生涯と思い出』
- 徳永徹（原案シナリオ）、西山尚宏・井上美香子・高木貴子・藤田健二（編集）、（2018）『徳永ヨシとその時代』、学校法人福岡女学院